
第四章 女の運動とレズビアニズムと

神楽じゃむ（一九五二年、「れ組スタジオ・東京」会員）

ずっと女の子が好きだった

すごく小さなときから、女の子が好きでしたよ。近所の子と遊ぶでしょ。そのときから「隣の○○ちゃん」とか「隣のお姉ちゃん」とか、幼稚園に行ったら「幼稚園の先生」とかね。好きだといっても「好きだ、好きだ」と追っかけ回すわけでもなし、「あのお姉ちゃんが好き」と言うわけでもなし、ただ自分の心のなかにあっただけじゃないですかね。

でも、あれは中学か、高校だったかなあ。すごく好きな子がいて。面白い子でもあったし、興味を惹かれて、ずっと側にくっついていたんだよね。なんか離れられなかったの。そうしたら「気持ち悪い」って言われて。別にべたべたしていたわけじゃないよ。彼女に「レズか」って言われたかなあ。そんな記憶があるなあ。それで私、ぱつと離れて、もうあんまりその子の側には行かなかった。

気が強くて、何でも口にするタイプの女の子っているじゃない。そういう子が小学校五年生のときに一人いてね。「私は女の子が好き」「○○ちゃんのが大好き」って元気に大きな声で言いまわっている子がいて、周りの男の子たちから叩かれてましたね。それは憶えますね。「同性

同士がふれ合うことは気持ち悪い」ということを知るの、かなり早い時期なんじゃないかな。私はわりとおとなしいほうだったから「女の子が好きなんだ」ということをべらべらしゃべらなかつたけど、高校ではすでにかなり悩んでいたと思うのね。

高校のときにはもう、「レズビアン」がばんばんテレビに出てましたよ。サングラスをかけて出てきて、男装で。テレビに出るレズビアンと言えば、あのタイプでしたよね。みんな「レズ」という言葉を知っていたし、私もそういうのを見て「なんか嫌だな」と思いましたよね。だから「自分もしかしたらレズビアンかも」なんて、簡単には受け入れられないですよ。

大学卒業後、インドへ

大学進学で大阪から京都に出て、下宿していました。大学を出てすぐ、私はネパールとインドに行っているんですね（一九七六年二月）。ワンダーフォーゲル部だったんですけど、隣の山岳部の女の子がヒマラヤのトレッキングに行くっていうから、「私も行く！」って。就職もせず、卒業式にも出ずに行っちゃいました。二人で行ったんだけど、向こうで別れて、一人でネパールからインドに入ったのね。お金がなくなつて、日本に帰つて来たのは、九月の始めぐらいだったんじゃないかな。六ヶ月ぐらいは放浪してましたよ。

就職しなかつたのは、自分のレズビアン性のことがありましたよね。就職したら、女の人はまづお化粧をして、スカートを履かなきゃいけなかつたでしょ。「そんなこと、できっこない」というのがわかつていたから、求人情報も見もしなかつたですよ。まったく関心がなかつた。就職活動なんて一切しなかつたですよ。

「直そう」という発想はなかったけど、やっぱり苦しかったですよ。学生時代は自分がレズビアンであろうが、いいわけじゃないですか。自分のレズビアン性に向き合わなくてもいいわけじゃないですか。でも、「どうとう向き合わなくちゃいけないときが来た」「これを何とかしなくちゃ息ができない」というかんじで、どんどん、どんどん苦しくなる。インドに行った深い動機としては、自分のレズビアン性の問題があったと思いますね。

私たち二人、どこにでもテントをもって行く人間たちだからね、トレッキングにもテントもっていったんですよ。宿に泊まらないで、そのへんにテントを張るわけですよ。そうしたら、山岳部の子が妙に神経質なのよ。「女二人でこうやって泊まっているのを、みんなが怪しいと思っている」ということを言うんですよ。私は、そんなこと、あんまり気にしていませんけど、彼女は私のことをレズビアンじゃないかと思っていて、そのことに神経質になっていると私は感じましたね。とくに仲の良いこともなかったから、意外でしたよね。

インドでかなり長い間、放浪したでしょ。ずっと一人なわけですよ。やっぱり自分のレズビアン性に向き合わざるを得ない。「これを何とかしなくちゃ」と。あるとき、同じクラブの先輩から、旅先に一冊の本が送られてきたのね。「この本を読んでいると、神楽さんを思い出す」と書いてあった。吉田知子の『無明長夜』(一九七〇)という本なんですけど、それが「もう、やんなっちゃう」というくらい暗い本なんです。確かにね、露骨には書いていないんだけど、同性愛っぽいものは、その本のなかにあったような気がする。同性を好きになる女の心の重さっていうのかなあ。そういう本だったと思うんですね。

それを読んで、私はものすごく衝撃を受けたんですね。「これは神楽さんみたいだ」という言葉

と、救いようなない暗さ。救いがないでしょ、このタイトル。明かりもない長い夜。「こんなひどい本をよく私に送ってきたわね」と思っただけ。それが、長いこと好きだった先輩からだったから、なおさらシヨックだったというのもあったんだけどね。でも、この本を読んで「そうなんです、私はレズビアンなんです」と初めて覚悟を決めたのね。解放されてはいないですよ。重苦しいままに日本に帰ってきました（一九七六年十月）。

京都「シャンバラ」

大阪の実家に戻って、しばらくはアルバイトをしました。母にお金を借りて旅行に行ったので、それを返さなきゃいけなかったからね。大学の後輩にも「帰って来たよ」って連絡をとったんだよね。そうしたら、「神楽さん、京都に面白いお店ができてるよ」と教えてくれて。私だったら興味をもつだろうというのが、わかってるんですよ。それが、Oさんという女の運動家が中心になって京都で開いていた「シャンバラ」。そのチラシをもってきてくれたんですよ。「あ、面白そう。行く行く」って出かけていった。それで、女の運動関係の人と知り合うわけです。

その頃、私の出会った人たちは、意外とレズビアンなんです。今や、ほとんどレズビアンになっているのかな。でも当時は「自分がレズビアンなのかわからない」と言う人が多かったの。かなりはっきり「自分は女が好き」と言っている子もいたけど、でもみんなわりと「女が好きだけど、まだわからない」と言っていたのね。その頃は、シャンバラなんかでも、そういうかんじだったのね。

当時は、女の運動家がいろいろなお店をやっていたんだけど、そういう女のお店で、東京で始

まっていたレズビアン運動のことも知ったのかな。大阪にある「一膳飯屋もりもり」とか何とか言ったかなあ、そこに食べに行ったときに、わら半紙に刷ってあった小さな記事を見つけたんです。ある女のイベントで、数人のレズビアンが、舞台上が上がって「レズビアン宣言をした」って書いてあった。「まいにち大工」のことかな。

それを読んで私は「東京に行こう」と決めたのね。とにかくレズビアン運動をやっている人たちに、私も加わりたと思った。それだけです、目的は。それで、シャンバラに来ていた東京からの運動関係の人に、「私、東京に行くんです」と言っていた。そうすると、「あんた、どこか知ってるよ、あるの?」「ないんです」「じゃあ、部屋を貸したいって言うてる人がいるから、そこ行く?」って、みんな情報をくれるわけですよ。「うん、そこに行く」っていうかんじで、東京に出ていったんですね。

東京へ（一九七八年）

東京に出たのは一九七八年の九月か、十月。出てきてすぐ二十六歳になった。「まいにち大工」のことは知っていたので、すぐに連絡をとって、ミーティングに加わったんですね。でもねえ、行ったときはすでに「まいにち大工」は解散するのしないの、つてがたがたしていて、すぐになくなっちゃったんですよ。そのあとの「ひかりぐるま」もなくなりました。

あと、ちょうど『女ならやってみな』Ⅲの上映準備の最中でしたね。私は大阪でそのことを聞いていて、「私も仲間に入れてもらおう」なんて思って、手伝いに入った。あの映画祭は、わりとレズビアンが中心になってやっていたんですけどね。レズビアンに会うことによって、かなり自

分が楽になったというのがありますね。

私は運動家タイプの人たちと付き合って行くことなるんですね。それこそリブ新宿センターなんかに入りに入っていた人たちと。そういう人たちが「選択してレズビアンになる」という言葉を使っていたのね。「自分はレズビアンを選択する」って言い方をしていたと思います。「選択なんてこと、あるの？」って、初めはびつくりでしたね。「そういうのは、選択してなったりならなかったりするものか」って、ちょっと信じられなかったですね。私は、レズビアンというのは本当に小さい頃からそういうふうになっているものだと思っていたからね。

「選択」というのは、私には実感としてはわかりませんよ。でも「いろんななり方があるんだ」ということだけはわかりましたね、自分以外のレズビアンに出会うことによって。たとえば結婚していた人だって、レズビアンになるわけでしょ。四十歳までぜんぜん自分のレズビアン性に気づかず、突如として目覚める人もいるわけでしょ。そういう意味で、なり方は一つではない、というかね。

一九八〇年にはJORAで「女女女たちのコンサート」をやったね。Sさんがやっていた「ルビー・フルーツ・ジャングル」というバンドに来てくれて、京都まで呼びに行ったんだわ、私。Sさんとはシャンバラで出会ったのかな。

三十歳で自営に（一九八二年）

東京に出てきて、その年（一九七八年）の暮れは、ともかくバイトをしてたんですね。お歳暮配達。それで翌年に、映画祭で出会った人から「雇用保険で給付を受けながら職業訓練校に行け

るよ」と教えてもらったのね。それで「会社に勤める！」って就職した。当時、女の運動の人たちが、身を立てるのに写植をよくやったんですよ。私も会社に入るのは苦手だから、自営業者になりたいというのがあったけど、かといって何になっただけいいのかもわからなかったもので、皆の真似してオフセット印刷の会社に入ったんですよ。ともかく雇用保険をもらおうと思って、一年間、会社に勤めているね。

それで、二十七歳で「一年勤めたので辞めます」といって、雇用保険をもらって、職業訓練校に入りますね。室内施工科に一年間、通って、二十八歳で室内装飾関係の会社に就職した。いちばん最初に教えられたのは、ふすま張り。公団の仕事なんかを請け負っていたところで、空き部屋ができるトラックでふすまを引き上げてきて、張り替えて、収めるのね。私は、外の現場に出て、クロスを張ったりとか、絨毯を張ったりとかいったことをやりたかったんだけど、なかなか連れて行ってもらえなかったのね。現場には職人頭がいるわけですよ。その人が女の人が苦手だったみたいで。やっぱり使いづらいんですよね、「おいこらっ」ってできないから。で、社長に直談判して、連れて行ってもらったんですよ、現場に。それで、見よう見まねで覚えて。面白かったし、ものすごく一生懸命やりましたよ。

でも、「ここではこれ以上のことはないな」と思ったときに、辞めたんですよ。いろんなところに行ったほうが勉強できると聞いていたもんだから、私もそうしようと思った。それで、電話帳で調べて「どうでしょう。雇ってもらえませんか」って電話したりしたんだけど、もう、けんもほろろだったのね。室内装飾の会社なんて、家内でやっているところが多いんですよ。社長の夫はわりと関心を示して、いい返事をくれるんだけど、妻が出たとたんにダメだったんですよ。

女が女を嫌がりますよね。「若い女に入ってこられたら、自分の夫が……」とか、心配するのかわかりませんけどね。

「どうしようかな」ってしばらくプラプラしていたんだけど、その頃、若林さんが積極的に「女のからだ・ティーチイン」^四をやっていたんですね。私も出入りしていて、ティーチインを通じて、婦人民主新聞の人と知り合うのかな。若林さんのティーチインの記事を新聞に載せるというんで、私も絵を描いたりしたのね。ちよつとした文章を載せたこともあるんだけど。で、「こういう仕事をやってます」って言ったたら、「事務所を改装したいから、あなた仕事やらない」という話が来て。それが初めての改装の仕事。契約を交わしたのが三〇歳の誕生日だった。だから、すごく憶えているんです。「誕生日にこんな契約書が交わせるなんて嬉しい」みたいな。しかも婦人民主クラブでしょ。こんな嬉しいこと、ないじゃないですか。それから私は、自営になるんですね。

スライド上映会（一九八四年末）

スライドの上映会、やりましたねえ。アメリカ人のカップルが、ジルだったかな、スライドをみせてくれて、「これ翻訳してぜひ上映しようよ」って、私と若林さんがやったのかな。（カセットテープが）出てきましたねえ。『日本語版 Woman-Loving-Woman かぐら・いなほ』って書いてある（朗読の書き起こしは後掲）。この導入の音楽は、オリビア・レコードのレズビアン之歌だね（図四―一）。日本来ていたアメリカのレズビアンが、レコードをもってきて売ってたの。

それで次に「日本版のスライドを作るう」という話になって、私と若林さんが作ったんだけど、そもそも仲間が少ない上に、当然、顔を出したくない人もいて、出てくれる人はそんなに集まら



図 4-1 Lesbian Concentrate ~ A LESBIANTHOLOGY OF SONGS AND POEMS のジャケット

なかった。「顔を出してもいい」という人はいたけど、それは、レズビアンの間だけで上映するという約束だったと思う。十分ぐらいの短いものでしたよ。

私はそれをもって、「第十一回ミシガン女の音楽祭(一九八六年夏)に上映しに行った。当時、日本人のレズビアンがけっこうアメリカにいたんですよ。彼女たちを訪ね歩いて、ミシガンでアメリカ人の恋人と落ち合った。ミシガン音楽祭のあと、その恋人とは別れたんですけどね。気分的には落ち込んでいるのに、でも、私、やる気満々になってミシガンから帰ってきたことを憶えているわ。「やるぞお」みたいなかんじで。外国に出ると、なんかクリエイティブになりま

すよね。でも、いったい何をやるうと思っただろう(笑)。

第二回レズビアン会議(一九八五年十一月二-四日)

第一回レズビアン会議(のちのウィークエンド)は、若林さんとカリド、それと日本にいる白人系のレズビアンたちと組んでやったんですよ。先日、そのとき作ったTシャツが出てきてね(図

して別に作って提出した。レズビアンたちには本物のプログラムを配っているわけですよ。その親が会館側に暴露したわけですよ。プログラムを送りつけて「あの人たちはこういうことをしようとしているんですよ」って。

会館側は、間際に知ったわけね。前日だったかなあ。すぐに私たちに連絡がきて、呼びつけられた。一緒にやっていた外国人と二人で行ったのかなあ。それで「あなたたちは二枚舌を使うのか」ということを言われた。私も「じゃあ、レズビアンだと出して、貸してくれたんですか」と聞いたんだけど、やっぱり躊躇したわね。はつきりとは答えてくれなかった。「いや、貸しま



図 4-2 第 1 回レズビアン会議で作られた
Tシャツのデザイン

四二二。これが好きでねえ。アメリカ人でレスリーって言ったかな。彼女が作って売っていた。なかなかいいシャツでしょ。だから、古いんだけど、捨てるに忍びなくて。実はそのとき、会館側から怒られたことがあったんだけどね。会館には「レズビアン」という言葉を出さないでおこう、ということにしたの。だから、プログラムも「国際女性フェミニスト会議」と

すよ」と言われたら、ぜったい記憶に残っているから。「いや、私たちも外国の情報で、そういうのがあるというのは知っています」という言い方だけだったと思う。それで、こういうふうと言われたね。「文化の日で、地元の子どもたちも利用する」「だから使ってもいいけど、レズビアンという言葉は、一切出さないでくれ」って。それを飲んだんですよ、「わかりました」って。直前だったしね。

それをものすごく怒る人もスタッフのなかにはいた。「なんでレズビアンという言葉を使っちゃいけないんだ」「おかしい」って。でもすぐに「じゃあ、ダイクで行こうよ」ということになって、それを使っていましたね。「ダイク」なら、他の人たちは知らないけど、私たちはわかるから。

二回目以降のオーガナイザーがどういう名前で会館を利用しているのかは、わからないですね。ただ、会館は知っているし、知っていても貸し続けてくれている。会館も利用されないと立場がないですよ。私たちは本当によく利用するしね。

れ組のごまめ（一九八五年五月）、れ組スタジオ・東京（一九八七年三月）

一九八五年に、私と若林さん、カリド、沢部さんにも声をかけて、それと沢部さんが当時一緒だった人、五人で、「れ組のごまめ」を作って『れ組通信』をやり始めたよね。スタジオの立ち上げは八七年三月ね。そのとき私は新たな恋人と一緒にいて、その恋人も加わってやりましたね。

でも、れスタは、どんどんどんどん、いろんな人がきて、そうしたらもうぐちゃぐちゃになっていってねえ。どういうふうにやっていくのか、しょっちゅうミーティングをしてみましたけどね、そこで話し合ったことが実行されるということは、ほとんどなかったですね（笑）。みんなア

アイデアは出すんだけど、ほとんどがアイデア倒れに終わって。私も含め、みんな仕事が忙しいときだったし。人数も多かったし、みんな自分勝手にやっていましたもんね。なんか運営自体がしっくりしていなかった。

すぐたくさんの人が集まってきたから、「私はもういいや」と思ったのね。皆さん、達者な文章を書く人たちだから、「私はもうやめ」みたいなかんじで、抜けました。私自身、やりたいことがあったからね。

すぐに沢部さんの「プライバシー事件」^五が出て。あれもね、何だろうね。私もいけなかったところがあるんだけど、何でああいうことになっちゃうんだろうな。今になって思うけど、問題の処理の仕方がやっぱりおかしいと思うな。「れ組スタジオ・東京」という器は一つで、そこにいろいろな人が流れ込んで来て、皆が個別に活動するというなかで、公に出てしまった。スタッフ間で信頼関係があれば、もっと違う処理の仕方があったかな、と今になって思うんですよ。

私は書かれた本人がどう思ったかを聞くことも大事だと思うんだけど、誰も問題にしなかった。考えたらおかしいと思いませんか？ 本人が「書かないでほしかった」「おかしい」と言えば、それはたいへんな問題じゃないですか。でも、本人に誰も接触しないし、実際は接触できない状況だったんです。後で聞いたところによると、その人はむしろ沢部さんに好意的でしたよ。むしろ『れ組通信』で公にされたことで騒ぎが大きくなってしまい、そのことのほうが傷ついたと聞いています。

レスピアンの男性性

タチネコに関する座談会（図四一三）は、実を言うと、私が企画したのね。あれは、私がアメリカの旅行から帰ってきたときで、やりたかったの。サンフランシスコで日本人のカップルの家に泊めてもらったのね。そのカップルの片方が、まあどっちかというところ、ポーツシユなんです。その頃、ポーツシユなレズビアンとかタチとかが、かなり否定的に言われていたんですね。でも彼女は、「そういうのはおかしい」とぜんぜん違うことを言ったのね。「男っぽいということは、決して悪いことじゃない」「自分はすばらしいものだと思う」つて。「自分自身は男っぽさを獲得してきた」「せっかく自分が獲得してきたものを」という言い方をしたんで、私は驚いたんですよ。男性的であることを肯定的に受け止めるのをね。

「思いっきりしゃべろうか」
 『タチネコって何？タチからの言い分』
 「タチ、ネコ」ということは、私はあまり好きではなく、だから普通は使いませんが、しかし、あえてここで使ったのは互いに「あのひとはブッチだ」とか「フェム」だとかレズテルをはりあうことに、実はウンザリしはじめているからで、じゃあ、この際「タチネコ」っていったい何なのか、いっぺんマナイタにのっけてやるうとの思いでこのテーマを思いついたのです。とはいえ、もくろみはおお真面目で、少しでもここで話したことが、レズビアンがより自由な女になっていくうえで、役立てばいいとおもいます。

私たちレズビアンもまたこの異性愛社会で生まれ育てられた子供です。各人、時代の基準に多少の差はあったとしても、いつも「男か女」、「女らしく」なければ「男」にと、どちらか二つのうちのひとつにはいるしかなかったように思います。私自身、自分以外のレズビアンにであうまでは、子供のころまわりの大人たちからよくいわれた「女らしくない」とか「男みないだ」ということばに、「私は女である」という自己認識を非常に脅かされました。たとえ「女らしさ」の拒否が、もう一方の性である、今は「男性性」と呼ばれるものの獲得に向かったとしても、それらを「男め」なものの中に入れて、それもまた女である私らしさとして、取込んでいきたいと思えます。しかし、子供時代の私を支配した女である自分を拒否した上で、「男性性」への自己同一であるなら、それらのものを脱捨てていきたいと思えます。



タチネコ

図 4-3 企画した座談会（『れ組通信』 No.11, 1988 年 2 月 1 日発行に掲載）

それで私は「レズビアンがもっている男性性」ということをみんなと話し合いたくて、企画を立てた。自分のなかに明確なものもなかったし、どういうふうに話をもっていくかというのもなかったんだけど、ただ、みんながどう思うのか、ということを知りたかった。ところが、話が別の方向に進んじやって、あんまり深められなかったんだけど、それ以後、私はそのテーマを追いかけなかったし、議論されることもなかったですね。

私自身もそうんだけど、ネコとかタチという言葉が好きになれないっていうこともあるんですね。これはなぜなのか、あまり上手く説明できないんだけど、たとえば「レズ」という言葉が嫌いなのと同じなのかなと思うんだけど。私が東京に来たときは、運動系の人たちは「ブッチ」「フェム」という言葉を使っていましたね。「タチネコ」という言葉、あまり使ってなかったですね。

京都でレズビアン会議をやったとき（一九八八年三月十九・二十一日、第十一回レズビアン・ウィークエンドⅡ第一回関西ウィークエンド）、一度、こういう事件があったんだけどね。全体会のときに、見るからにタチというか、レズビアン・バーで働いているかんじの人が来たんですね。「自分はいつも背広着てます」みたいなことを言ったかなあ。その彼女をとて攻撃する人がいたの。今考えたらすごいことなんだけど、「あなたのような人と一緒にはいたくない」というような、彼女をかなり傷つけるような発言があつて。彼女もたいへんな思いで来たと思うんだけどね。女の運動とレズビアニズムはくっついていていたから、そういう発言も出てきたと思うし、私自身、どう対応していいかわからなくて、彼女をサポートしなかった。「そういう人たちと自分たちは何を一緒にやるのか」ということを考えたこともなかったし。

女の問題か、同性愛の問題か

私たちの世代は女の運動の色合いが強いから、ネコとかタチとかいうのを非常に嫌ったのね。ブッチ、フェムの話もわざと取り上げない、というかんじがあった。でも、私がいスタができた頃から付き合っていた恋人というのは、私より十歳、年下で、なんか自分たちの世代だけで、新しい言葉を作って遊んでいるわけですよ。「あれはスカタチよ」とか「ズボネコよ」とかね^六。

あと、あんまり「運動、運動」って言わないの。女の運動を煙たがるようなところがありませんたよね。「女の運動？ なによ、それ。関係ないわ」「問題は同性愛よ」というかんじなの。私たちの世代は、同性愛の問題が女の運動とセットになっっているんですね。でも、私の恋人なんか「自分はフェミニストじゃない」と言っって、心理的にはアカーのほうに同調していたもん。そのへんに、年代の差が出ていると思うんだけどね。

でも、私も変わってきたところがあっってね、女の問題と同性愛の問題をくつつけないほうがいいというか、切り離せば問題がまた違ってくると思っただけがあった。「女の運動とくつつけることによつて、レズビアンレズビアンの正当性を主張しようとしてるんじゃないか」「なぜ私は、同性愛だというだけでは闘えないのか、自分を肯定できないのか」というふうに思っただけがあるんですよ。「レズビアンを肯定するために、社会に認めさせるために、女の運動を武器にしているんじゃないか」と、そういうふうにかんがえたことがありますよね。それで、だんだん、「同性愛は同性愛の問題だ」「女の問題と同性愛の問題は別々であつてもいい」と思っようになってきてますね。でも、私の場合はやっぱりその二つが一体化してて切り離せませんけどね。

家を建てる「ウーマンズ・ランド」

れスタには一年ぐらい関わったのかな。それ以後は、仕事のほうに軸足を移していったって、ウィークエンドにもあまり行かなくなりましたね。たまに行ったらつまらなくなっていたというか、若い人たちが増えたんだけど、みんなで何かをやるってかんじではなくなっていたのね。たとえばラウンジで席が空いていて「ここ、座っていい？」と聞くと、「いや、人が来るので」って。「それはないだろう」って心のなかで思ったけど、それが象徴的ですよ。私たちがやり始めた頃は、誰でも親しげに話をしたものだけれど。

やりたいこともあったのね。私はずっと家を建てたくて、三十四歳（一九八六年）でこの土地（茨城県）をすでに買っているんですね。アメリカにウーマンズ・ランドといって、女の人たちが集まって思い思いに家を建てているところがあるんですね。そのスライドを友人にみせてもらって、「私もこれをやりたい」って頭にぴかーっとひらめいた（笑）。それで土地を買ったんだけど、やっぱり仕事があるものすごく忙しくて。三十代はほとんど仕事。仕事に明け暮れていたってかんじですね。

八七年には、ある産婦人科病院の改装に入ってますね。病院を改装したわけですよ。女の人がいるところでしょ。みんなバジヤマでうろうろ歩いているんで、女の職人さんでやってほしいという要望で、私に白羽の矢が立って。そのときに、とにかく女の人を集めてね。

その頃すでに、「建築現場の女性ネットワーク」というのを作っていたのかなあ。仕事仲間でもあり女の運動で知り合いでもあるOさん、Mさんから誘われて、私も参加したんです。それで、

私はまたスライドを作るの。『道具をもった女たち』という題のね。それを女のイベントで上映しましたね（一九九二年十一月八日）。九二年だから四十歳になってるのね。

私は、四十五歳でやっとここに来て、家を建て始めるんですね。当時は何もなかった。ただの山林ですよ。草ぼうぼうのすさまじいところだったのね。当時、Mさんとは協力関係で仕事をやっていたので、あるとき何気なく「私はここに家を建てるんだけど、Mさんも好きそうだし、建てない？」と言ったんですよ。その頃、いい雑誌があつて「これいいなあ。Mさん、どう、これ」って。そうしたらその気になって、「自分も建てたい」って。そのうちもう一人女が加わって、仕事が入ったら仕事をやり、仕事のないときは家を建てていた。

最初に建てたのは九四年十一月、三坪の小さな小屋で、今、お風呂とトイレになっている部分。道具置き場に使っていました。本格的に田舎に引っ越して、作業場兼住まいを作り始めたのは九七年十一月ですね。本をみながら、基礎をつくるために穴掘りから全部やった、女三人で。全部、自分たちで建てたの。業者に入ってもらったのは、電気工事とか設備関係だけ。だからずいぶん時間がかかって、一年半かかりました。そこから建て増していく。住みつつ作るみたいなかんじ。今居るこの母屋は去年やっと完成した、十年掛かりでしたね。Mさんの家なんて、まだできていないところがあるもの（笑）。

再び、れスタの仲間と

仕事が忙しかったり、ここに家を建てたりということがあつて、しばらくれスタには関わらなかつたんですね。パレードができたというのも噂には聞いていたんだけど、お盆の頃って仕事が

入ってしまう。病院の仕事と違って、世の中がお休みにならないと工事に入れない現場なんですね。

だけど、ここにいると寂しいというか、飢えてしまうんですね。レズビアンの人に会いたくないやうですね。れスタも、いろんな人が入れ替わり立ち替わりやっていたけど、そのうち若林さんとか麻川さんとか、私が知っている人々がやるようになっていたんですね。家のこともある程度、落ち着いて、月に一度ぐらいは東京に出たい気分にもなっていたし。孤立感を深めていた時期だったので、「もう一度みんなに会いたいなあ」という気持ちになったのかな。れスタの運営には関われないし、そんなには東京にも行けない。せめて自分にできることは書くことだと思って、『れ組通信』にも投稿を始めました。

それから三年ぐらい前のパレード（東京レズビアン&ゲイパレード二〇〇五、八月十三日）になりますか、「私たちのエイジング／婚姻制度の外で年齢を重ねるということ」にパネラーとしてMさんと参加しました。まろうさんを通じてシンポジウムの話が来たんですね。それから私、パレードに行くようになりましただね。

最近、れスタのメンバーで「さくら倶楽部／いい女に出会いたい女たちの旅（ツアー）」というのを始めました。第一回目は、六本木の国立新美術館の「エミリー・カーム・ウングワレール」にしました（二〇〇八年七月十三日）。楽しい出会いの場もやっぱりほしいですね。

- 一 「まいにち大工」が「女の集会」(一九七八年一月二十八日、山手教会)で行ったアピールのことと思われる。その様子は「まいにち大工」の機関誌『ザ・ダイク』第二号で報告されている。それによれば、「女の集会」でレズビアンに関するテーマが登場したのは(略)、日本ではこれが最初」とのことである。
- 二 『おひかりぐるま』の創刊号は一九七八年四月五日、第二号は一九七八年九月一日に発行。
- 三 『おんなならやってみな』は第一回女たちの映画祭(一九七八年十一月十日)で上映されたデンマークの映画である。詳しくは第一章を参照。
- 四 「女のからだ・ティーチイン」については第二章を参照。
- 五 「プライバシー事件」については第三章を参照。
- 六 「スカタチ」はスカートを履いたタチ。「ズボネコ」はズボンを履いたネコ。外見と役割分担のねじれを表現した言葉。

聞き手・まとめ・脚注 杉浦郁子

二〇〇八年八月二十三日 神楽さんの自宅にて(茨城)